

令和4年度みやこユニバーサルデザイン審議会  
第1回みやこユニバーサルデザイン普及推進部会 会議録

日 時 令和4年10月17日(月) 午後2時～3時30分  
場 所 京都市本庁舎 4階 正庁の間  
出席委員 委員名簿のとおり

### はじめに(井川部会長)

昨年、委員の皆さんからレポートを出していただいた。その中で、やはりユニバーサルデザインの認知度を高めないと改善、取組が進んでいかないと認識した。本日の会議では、認知度の向上のための意見を皆さんから出し合っていただき、進めていきたい。

### 1 事務局からの報告

資料1に基づき報告

<質疑>

井川部会長： 交通バリアフリー推進会議とあるが、管轄はどこか。

事務局： 都市計画局歩くまち京都推進室である。

井川部会長： 私がユニバーサルデザインに関わるようになったきっかけは歩くまち京都推進室だった。同室はユニバーサルデザインと関係が深い。一方、ユニバーサルデザイン推進主任会議には都市計画局から誰が出席するのか。

事務局： 都市総務課の庶務担課長が出席している。

井川部会長： 連絡会議の機能が弱いのではないかと思っている。交通バリアフリー会議は、どうしても施設のバリアフリーが主になってしまう。ユニバーサルデザインはもう少し広い。京都駅では、鉄道事業者によって「改札口」であったり、「出口」であったり、改札の表記にばらつきがある。京都に住んでいる人であれば地理感もあり分かるかもしれないが、例えば外国の人にとっては、英訳も異なることになり分かりにくい。また、「出口」と言っても、建物の出口なのか駅の出口なのかも分かりにくい。こういうことは交通バリアフリーという括りでは課題として出てこない。ユニバーサルデザインはバリアフリーの施設的なことより範囲が広い。もう少し連携してやっていくべきだと思う。連絡会議に出席している部署から他の部署にもきちんと繋いでくれていけばよいが。交通バリアフリー会議にも、ユニバーサルデザインに関心のある方も多いので、連携できる機会があればよい。

### 2 井川部会長からの報告(資料2)

まちの中のユニバーサルデザインを進めるうえで、特に気になっていたのが、歩道の点字ブロックである。障害のある方への配慮が足りないのではないかというのが関心事だったので、京都市建設局に話をし、今試験的に取り組もうとしている。

資料1 ページ目の下に写真があるが、全国的にもよくある例である。本来点字ブロックは黄色でなければならないが、背景を気にするあまり、黄色にしていない。こういう例が京都にもある。これをなんとかできないかと思い、試験的な敷設を提案したものの。

2 ページ目を見ていただきたい。点字ブロックは視覚障害のある人にとっては必要なものだが、車いすの人にとっては移動の支障となることがある。福岡市営地下鉄では、点字ブロックの間に隙間を空けて車いすが走行しやすくしている。下の写真は、横断歩道と歩道の境界の段差がなだらかになって、良くなってきているが、あまりに段差がなくなると、視覚障害のある人は白杖が当たらず境界が分からなくなる。一方、車いすの人にとっては段差が少ない方がよい。両方のニーズを兼ね備えたものが埼玉県

熊谷市に敷設されている。国土交通省のガイドラインが1、2年ごとに更新され、こういった全国各自治体が独自に開発したり、工夫したりしている取組が紹介されている。

京都でもユニバーサルデザインに配慮した取組をやっていければと思っている。最後のページであるが、点字ブロックと周りの路面の輝度比は差があった方がよい。最初のページの写真では、ほとんど差がなく分かりにくく、かつ、黄色でないのでもさらに分かりにくい。ただ、やはり突然黄色の点字ブロックを敷設するということには抵抗感があり、これを何とかできないかというのがこの発想である。ブラウン系の歩道に対しては、点字ブロックの両側にブラウン系のコーディネートブロックを敷設して、輝度比を保ちながら背景になじませるような工夫ができないかと考えている。下の図は、下の方が横断歩道と思っていただきたい。歩道と横断歩道の境界部分の点字ブロックの間に隙間を作り、隙間の部分の色もアスファルトの色ではなく、滑らない素材で黄色にしてはどうかというのがこの案である。これを今、建設局とブロックメーカーと協力し合って、試験的にどこかに敷設できないかという協議をしており、今年度中にやっていくつもりである。この場を借りて御報告させていただいた。

### 3 ユニバーサルデザインの普及推進の進め方について（資料3）

井川部会長： ユニバーサルデザインの認知度向上のための取組について自由にご発言をいただきたい。

いろいろ取組をしているが、委員皆さんのそれぞれの立場で、もうちょっとここはこうしてほしいとか、生活者としてもっとこうであってほしい、そのためにこういった取組をして、もうちょっとユニバーサルデザインの認知度を高めた方が、といった御意見をいただければと思う。

神岡委員： ユニバーサルデザイン賞について、応募がほぼ小中学校に限られている。私は上京区役所の近くに勤めているが、近くに小学校があり、5年程前からチラシを持って行って、説明しようと思ってもなかなか会ってもらえない。ポストに入れておいても全く反応がない。町内会の役員会で紹介したり、近くの学生マンションに配布したりしている。2年前は、当時勤めていた京都大学の研究所で、障害保健福祉推進室から講師に来てもらい、説明会をしてもらった。担当教授は非常に感心し、来年は新入生歓迎会でしてもらいたいと話をしていたがコロナでなくなってしまった。働きかけをすれば協力はしてもらえるとと思う。自分の仕事関係など努力はしている。小学校の反応がなかったのは不思議であるが、当小学校は学校に対する区民の支援組織があり働きかけを行ったが、関係ないと言われショックを受けたことがある。府庁の近くに留学生寮があり、何が困るかという日常生活に非常に困るという。以前、東南アジアからの留学生が来る際、関空から京都駅まで、京都駅から大学まで来るのにも分からないので迎えに行き、出口で待って大学まで連れていくということもしていた。実際に日常生活も難しい。市でも5か国語のパンフレットがあるが、渡されていない場合もある。これから外国人や子どもなど、優先順位をつけて働きかけがひつようではないか。関心がない人でも説明すれば興味を持ってもらえる。

幅広くいろいろな所でちょっとした説明をすること、いろいろな所への働きかけが大事だと思う。

井川部会長： 小中学校、高校に対して、局の方で話を聞きに行ったりして、今年度のUD賞について改善をしていると思うが、報告してもらいたい。

事務局： 昨年度の御意見を受け、ほとんどが小中学生からの応募なので、高校生からも応募してもらえるようにするには、どのような賞であればよいか、いくつかの高校に話を聞かせてもらいに行った。そうやって行って話をすると興味を持っていただき、

取り組めたらよいという話もいただいた。ただ、高校のカリキュラム的に、これまでの夏休み明けの締切にすると、初めの1学期で取り組むというのが期間としては短いという話があった。それも踏まえ今回は6月から12月までを応募期間として現在募集を行っているところである。特に高校生からどのくらい応募があるか、現時点では効果がわからないが、このような改善を行った。

また、実際に話を聞く中で、昨年度の当部会でも意見をいただいていたが、やはり発表の機会や、特に高校生になると実用化ができないかとか、企業に対しプレゼンする機会があればという話もあったが、まだそこまでは実現できていない状況ではある。ただ、そういった御意見を聞くことで、今後この賞をどのようにしていくかを深く考えられるということを実感したので、こういった機会を今後も作っていかねばならないと思う。

先ほど神岡委員から御発言いただいたように、いろいろな所へこちらから働きかけをしていくことが必要と思っている。あまり考えなくても便利な世の中になっているので、普通の学生などはあまり気にしていないということが多いと思うが、昨年度、市内の大学のゼミで1コマ時間をいただきユニバーサルデザインについてワークショップをする機会をいただいた。そのようにテーマを挙げて学生たちに考えてもらおうと、今まで気づいてなかったけど、これがユニバーサルデザインだったのだということに気づいていただけた。とても興味を持っていただけて、今後も取り組みたいという意見もいただけたので、今後もそういった機会が必要だと考えている。

神岡委員： 去年の受賞作品を四条通地下道に展示していただいたが、どうだったか。

事務局： 特に効果等を把握していないが、数回様子を観察しに行った際には、じっくり見ている方はおられなかったので、展示の方法等、検討が必要かもしれない。

神岡委員： 地上の店舗などが充実してきているためか、地下道を通る人は少なくなってきた。今日、地下鉄駅から地下道を通ってこの会場まで来たが、名産品などが飾ってあった。そこに展示し、それを市民しんぶんで広報するなどしてはどうか。入賞した児童・生徒にとって、誰かに知ってもらっているということは大事だと思う。

井川部会長： 地下道は立ち止まるということがあまりできない。だからといって何もしないというのもよくないので、回を重ねていくと認知度も少しずつ高まってくるので、重ねていくことが大事。市役所の地下道もあるし、できれば民間のスペースを貸してもらえないか。例えば、四条烏丸の経済センターにある大垣書店のスペースなどを借りられたら一番良いが、使用料が必要かと思う。私が大学に在籍していた時、全国デザインコンクールを行っていた。その時は河原町通にある丸善のエレベーター脇スペースを借りて展示していたことがある。どこか皆さんの周りでそういった市民の方の少しでも目に付くところがあればいいと思う。

また、表彰式もやった方がよいのではないかと思う。子どもたちにとって励みになると思う。

どこへ行っても言えば関心を持ってもらえる。言われれば気が付くが、何もないとそこまで関心がいかない。それが問題である。人口における年齢構成を考えると、どんどん若い人が少なくなり、高齢者が増えてくる。絶対にユニバーサルデザインを進めないとなんが困る。そういうことに気づいてもらい、まちづくり、サービスを含め、いろんな場面でユニバーサルデザインを充実していかないと、今までの時代ようにはいかない。それをみんなわかっていないのが歯がゆい。

京都市は人口減少数が全国の市町村で1位。人口が減っていくとサービスが回っていかない。そういうことも含めユニバーサルデザインを進めていかねばならない。

行政の文書を見ていると、これまでバリアフリーという言葉が使われてきたが、最近ユニバーサルデザインという言葉を使い始めている。そういう意味では、今はまさにユニバーサルデザインの時代だということを知ってきてはいる。しかし、どう実行するかということまで行きつかないというのが問題だと思う。

上田委員： 8月の審議会で、京都手をつなぐ育成会のキャラバン隊のチラシをお配りさせてもらった。これは、知的障害や発達障害の方を知ってもらうための取組である。委員の方からのレポートの意見として、普及を進めていくには体験の場があった方がよいという御意見があるが、障害保健福祉推進室が小中学校を対象に、ほほえみ交流活動事業をしている。キャラバン隊の活動は以前からしていたが、3年前からほほえみ交流活動に参加し、一昨年、昨年と1校ずつで実施した。いずれも小学校4年生が対象だった。小学校4年生というのは、考え方をずっと吸収するのに適していると教育委員会の方から聞いたことがある。私も子どもが育成学級に通っていたが、4年生が本当に大事だと感じた。4年生までは、障害があると分かっているけど普通に接してくれるが、5年生になると知恵・知識がついてくるのか、一歩距離を置いてくる。4年生が一番よいタイミングだと思う。今年も小学校4年生を対象に実施させていただいた。12月には中学校でも実施させてもらう。来年には障害保健福祉推進室からの依頼で、企業向けに話をさせてもらう機会を得ている。

小中学校は教育委員会が関わっているので周知しやすいが、その他はなかなか繋がっていないというのが難点。今年の7月から、こういった会議に出席したとことを会員の皆様にお知らせするため会報に掲載している。ユニバーサルデザイン審議会のことも報告した。「ユニバーサルデザインとは」ということも書いたが、文章で書くと分かりにくい。ユニバーサルデザインについてのリーフレットを理事長会でお配りしたが、あのような立派なものでもなく、A4裏表でカラー刷りのPRのチラシがあればよいと思う。ユニバーサルデザインとはこういうもの、私たちにとって大切なものだということをPRできる。

少し前、阪急電鉄の駅にヘルプマークのポスターが3～4枚続けて貼られていた。1枚で十分だが、空いているから貼ってくれていたのだと思う。あのように電車やバスの車内にも掲示してはどうか。市バスでも小学生の作品などを掲示している。今は広告が少ないからかもしれないが、空いているスペースがあるなら、ポスターを貼っていただければ、交通機関を利用される方に見ていただける。やはりPRが大切と思うので考えてもらいたい。

井川部会長： 交通局とタイアップして何かできないか。普通のやり方ではお金かかってしまう。大学勤務時、地下鉄のドアの付近にステッカーを貼ってもらった気がする。そういったことも工夫すると良いと思う。ユニバーサルデザインは領域が広いが、その部分に適したPR方法がある。難しい印刷物があっても読まないの、まずは分かりやすいものを作るというのも大事かもしれない。

阪根委員： ほほえみ交流活動は2回ほど手伝ったことがある。京都府の「京のスポーツ夢バンク」に登録しており、講演にも行かせてもらっている。そういった形での発信も大事だと思う。

子どもたちは、まちの中が便利になりすぎて、何が不便かわからない。質問しても一体何が困るのか、不便なのか分からないので、こちらも工夫して、考える機会を提供しなければならない。私は車いすバスケだけでなく、心のバリアフリーを伝えているが、この便利なまちの中で、エレベーターが止まり、階段しか上階へ行く手段がなくなった、でも私は上階に行きたい、どうする？というふうに問いかないと、子どもたちは考えない。私は子どもに伝える側として、子どもたちが考えられるような言葉を提供

するようにしている。

UD賞について、受賞作品を飾るのも、人が立ち止まるバス停や、河原町通などでも表側に面した、ふと立ち止まったり、人と待ち合せしたりするような場所の方が目に留まるのではないかと思う。

井川部会長： 今年の7月に小学校4年生を対象に講義に行かせていただいた。担当の先生方が熱心で、自分たちなりに調べたりして進めてもらっており、質問なども活発にしてもらった。子どもたちには働きかけが重要だと思う。現在のUD賞で少し気になるのが、個人プレイになってしまうところ。みんなで話し合っ、グループで提案するとした方が、学校の教育の場では受け入れられやすいのではないかと思う。学校、特に高校ではそういった取組を積極的にしている。個人でどうかではなく、みんなで話し合っ、どうすればよいかと考えていく。予算縮小の中で難しいところもあるが、グループでアイデアを出し合っ、まず学校の中で予選会をやってもらい、学校の代表を決めてもらう。各学校の代表が集まっ、みんなでユニバーサルデザインについて考えるような取組が、本来教育として良いのではないか。小学生には難しいかもしれないが、中・高・大学生では、みんなでユニバーサルデザインを考えるということにしていけば、今より関心が広がっていくのではないかと思う。

一番問題なのは、多くの人が自分とユニバーサルデザインは関係がないと思っていることである。しかし、誰にも関係がある。自分たちが生活していく中で、常に関わっ、っていくこと。そういうきっかけづくり、多様性を認めるということがベースにないとユニバーサルデザインは進まない。その仕組みを考えないといけな。

一回ダメだったからとやめるのではなく、続けながら工夫していくことが必要。

今後、人口が減り、高齢者が増えていくと、税収も増えず、行政の余裕がなくなる。日本の全自治体がそうである。今後、10～20年で建物も建て替えていかなければならず、そこには必ずユニバーサルデザインが必要だが、自治体の予算だけではやっていけな。何が重要かという、民間の事業と連携してやっていくことが大事になってくる。民間の企業はボランティアではなく、利益を上げていかないと成り立っていかないので、企業も成り立ち、自治体もそれによって恩恵を受けるという方策を考えていかないといけな。そのような時代に入っている。そのことにみんなが関心を持っていかないと、当たり前なことだが、みんながサービスの恩恵を受けられなくなる。図書館など公共施設は民間が運営するようになるのではないか。

木戸委員： 先ほどから子どもの話が出ているが、実際に子どもたちはあまり考えていない。でも、問いかけると考えてくれるし、自分の体験が考えるきっかけになる。そういうことがすごく大事。

児童館は、0歳から18歳までの子どもが来るので、特に土曜日は乳幼児の親子、小学生、中高生が同じ空間で過ごす。年代間で仲良くはするが、そのうち、「自分たちだけでドッジボールをやりたい」となってくると、事務室に「僕らがやりたいのに小さい子がいるからできない」と言いに来る。「無理なことはない、どうしたらよいか考えよう」ということを繰り返し言うと、最近では相談に来ずに、自分たちで考えて、午前中は小さい子どもたちとたくさん遊び、もういいだろうと思ったら、「自分たちで遊んでいいか？」と交渉するようになり、赤ちゃんのおもちゃを自分たちで移動させ、こっちへどうぞと案内し、自分たちは広いスペースで時間を決めてやるということ、自分たちからできるようになった。やはり、子どもはきっかけがあれば自分たちで考えられるということが改めて分かった。

SDGsも、初めは何のことか分からなかつたが、言い続けられると自然に関心も湧き、自分でも調べ、自分にできることはなんだろうと考えたりもした。ユニバーサルデザインもここでは普通に飛び交う言葉だが、一般の社会、子どもたちの中ではまだ

浸透していないのが現状。言い続ける、やり続けることが大事だと思っている。

いつもUD賞の案内が児童館にも配られ、皆さんに応募を呼び掛けているが、あれは作品を求められているのか、それとも意識を広げるための物なのか。どちらなのか。

事務局： ユニバーサルデザインについて考えてもらうきっかけとして賞を実施している。普及、考え方の浸透を主目的とし、そのための手段として実施している。

木戸委員： 個人で考えることになるので、なかなか浸透していかないのが現状。阪根委員が言っておられたように、「私はこういう状況で困っている、どうすればよい？」と投げかけ、それについてみんなで考えるとか、また直接的ではないかもしれないがユニバーサルデザインに関してこういう活動をやっている、これもユニバーサルデザインに繋がっているというような活動の応募もあってもよいのではないか。そちらのほうが数としても集まるかもしれないし、学校でもそういう取組をやっている。児童館でも子どもたちに具体的な場面でどうすればよいかということ投げかけると、どんな案が出てくるにせよ反応があると思う。ユニバーサルデザインという言葉やそれについて考えるきっかけになるので、浸透に繋がると皆さんのお話を聞いていて思った。

井川部会長： 児童館で様々な年代の子どもたちが工夫してやっているというのは、まさにユニバーサルデザインのあるべき姿だと思う。ユニバーサルデザイン賞のテーマ設定や募集のやり方も課題があるかもしれない。

子どもは素直なので、その年代に浸透させておくことは本当に大事だと思う。

教育のユニバーサルデザインというものがあり、伊丹市で進んだ取組を行っている。総合教育センターがあり、そこに赴任した教職員は、教育のユニバーサルデザインを研究し、授業にも反映する。国からも補助が出ていると思う。障害のある人の対応も大事だし、そうでない子のことを考えても、授業についていけない子、いけない子もいて、いろんな子どもがいる。いろんな人がいる中でどのような教育がよいのか、そういう視点も必要だということを入れておかないといけないと思う。

古川委員： 公共スペースでの展示という話があったが、ゼスト御池地下街でも展示などをしている。商店街のコミュニティスペースなどもあり、ポスターの展示などでもできるかもしれない。そういった形で協力していければと思う。

井川部会長： 京都市では三条商店街など活発な商店街もあるが、一般的には商店街には難しい時代に来ているという気がする。高齢者のお客さんが多くなっていると思うが、小学生と交流をすることで、商店街にとってもプラスになり、ユニバーサルデザインのアピールになるようなことができないかと思った。

高岡委員： UD賞について、公募の記事は掲載しているが、成果に結びついていないのではないかとと思っている。文字だけではなかなか伝わっていないのではないかとと思う。それぞれ学校出向いて知ってもらうことが大事かと思う。応募は、だいたいいつも同じ学校で偏りがある。また、子どもだけではなく、大人にも広げたいとも思う。ユニバーサルデザインについての認知度は低い。SDGsバッジのようなものを提案できないかとも考えた。昨年度は表彰式ができなかったということもあった。何らかの形で、応募へのきっかけづくりができないかと策を尽くしたい。

ポスターを募集して、実際にポスターとして掲示してもらえとか、地下鉄の車内にも掲出していただきたい。「ユニバーサルデザインの日」を作るとかも考えられれば良いと思う。

井川部会長： 京都新聞で5行分くらいのちょっとしたスペースに、1か月に1, 2回でもユニバーサルデザインについて掲載してもらえないか。

高岡委員： 毎週月曜日、福祉のページを持っている。講演会などイベントの周知を載せている箇所がある。例えば、市民の方が広く参加する勉強会をするなどの記事であれば掲載することができる。ユニバーサルデザインを考えよう、というだけでは難しい。きっかけを与えていただければ載せられるかと思う。

上田委員： 福祉のページに、福祉に関係する人を紹介する記事があると思うが、そのようなコーナーで、ユニバーサルデザイン賞の受賞者を紹介して、どのような考えでそのアイデアに至ったのかなどを載せていただければよいと思う。去年の7月に日曜プラスで、兵庫県の育成会と山陽電鉄が協力して掲示した、知的障害・発達障害の方は独語があったり、うろうろしたりすることがあるということを紹介するポスターについて掲載されている。このように取り上げてもらえないか。

高岡委員： 新聞に載ることで認知を広められるので、何か考えられたら良いと思う。

井川部会長： 大げさなことでなく、小さくてもよいので、2行くらいの例えば小学生の「席を譲ったらとても喜ばれた」などのエピソードや、いろんな人の立場で1, 2行の文章を掲載して、タイトルを「ユニバーサルデザインのまち」などとし、そういうのを1か月に1回でも続けていくと目立ったりする。いろいろな人の立場での言葉を掲載することで、そういったことがユニバーサルデザインだということが伝わると思う。大げさな記事だとそれ1回で終わってしまう。わずかなことでよいので続けていくことが大切だと思う。ご検討いただけないかと思う。

八田委員： ユニバーサルデザインフォントが教科書では全部採用されている。今後、学生が身近に触れるものになると思う。

京都市で発行している印刷物で10%がUD未対応だったという報告が審議会であったが、目にする範囲ではまだまだ浸透していないと感じていたので、9割が対応しているのかと逆に驚いた。

京都市や府が発行するもので、ユニバーサルデザインフォントを使ったところに、必ず解説をつけるということを継続すれば、それなりに露出量が増える。そうやって、ある程度の閾値を超えればSDGsのようになると思っている。ユニバーサルデザインのほうが歴史は古いが、国連の戦略でSDGsバブルとなってしまった。SDGsは専属部署があるので、ユニバーサルデザインと一緒に推進すれば強力になると感じる。いろいろなところで接する機会を増やすことを予算の範囲内で市の資源を使って展開していくのが良いと思う。知っていただく、考えていただくきっかけにユニバーサルデザイン賞が位置付けられていると思う。昨年、四条通地下道で展示があったが、受賞者がそこに行く、そこに掲示されているということを家族や友達に言えば、PRが適うのではないかと思う。

個人応募と団体応募では、団体の方が、複数人がそこで考え、受賞すれば、一つの表彰状で複数の表彰になるので、PRにも有効かと思う。

井川部会長 SDGsはどこが所管しているのか。

事務局： 総合企画局が所管している。SDGsの担当に連携やイベントでの協働などの可能性について問い合わせをしている。新型コロナの影響で、SDGsについてもイベントなどはできていないとのことだった。SDGs担当でもコンテストをやっ

いるので、一緒にできればという話もしていた。京都大学が事務局で様々な取組を行っている京都超コンソーシアムが組織されており、メンバーにも、UD担当からの相談については共有しておくとのことだった。

井川部会長： SDGs とユニバーサルデザインがどのように関係しているかが分かればより良いと思う。

民間企業の協力をいただかないといけないときが来ているので、八田委員には、京都の企業の中でもユニバーサルデザインに取り組んで関心を持っていただくような働きかけ、認知度の向上に取り組んでもらえればありがたい。

八田委員： SDGs は間違いなくどの企業でも取り組んでいる。その文脈に乗っかることができればよいと思う。改めて「ユニバーサルデザイン」というと、「もうSDGsをやっている」となりがちだと思う。SDGsの17の目標の中に、ユニバーサルデザインと合致するものは複数あると思うので、それをうまく絡められればよいと思う。

井川部会長： 企業には、SDGsとうまく絡ませながら説明するのがよいと思っている。御協力をお願いしたい。本日の話をまとめ、これからの方向にいかせるようにしていきたい。

昨年、皆さんにレポートをお願いしたが、初めてということもあり漠然としたテーマで書いてもらった。それはそれでよかったが、あとでまとめるときに、あまりにもいろいろな方向で意見が出たためまとめにくかった。改めて、今回、具体的に大きな2, 3の質問でレポートをお願いできればと思っている。今年もそういった形で皆様をお願いしたいと考えているが、ご賛同いただけるか。(⇒委員賛同)

それでは、今年もそういった形で進めさせていただくので御協力をお願いします。

(以上)